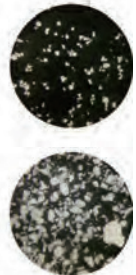
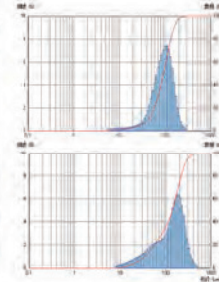
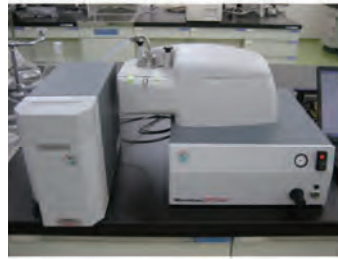




くすりの動きをコントロール

投与された薬物が体内でどのように動き、どのように効果を発揮するか、そのメカニズムを調べています。薬が体に効くためには体内に入りやすい、効き目が持続する、狙った部位だけに作用させる—など、動きをコントロールする必要があります。薬を使って、思いがけない症状や副作用が出たら、なぜそうなったか、すぐ調べなければなりません。これが私の研究の一つです。

粒度分布測定装置



製品間でこんなに違った：口の中での粒子の大きさ

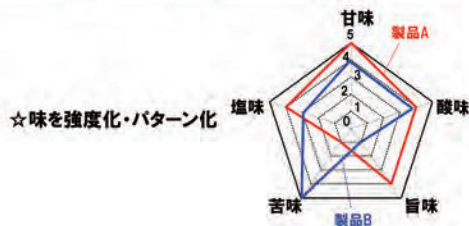
患者さんや薬剤師の声を投薬改善に

もう一つは、日ごろ薬を調剤・使用している薬剤師などから届く声に耳を傾けて、のみやすく改良する工夫や、薬のみ合わせの注意点など、具体的な改善策や提案を医療の現場に届けることです。

薬の味が良くない、変なおいがる、というような苦情があることが分かったら、その原因を調べるとともに、のみ方の工夫を提案したり、メーカーに改善を求めるともあります。自身の研究データをもとに、どの果実ジュースと一緒に飲むのは避けるように—、など具体的に指示します。

このように医療現場と密接につながった研究ですので、日ごろから薬剤師とのコミュニケーションが大事になります。薬剤師会の集まりに出て生の声を聞くほか、薬剤師が多く参加する学会に出て研究発表をすることで、広く知らせたり、逆に提案を取り入れたりすることなどを心がけています。

味覚センサー



品質評価方法を工夫し提案

薬は厳しい審査を経て販売されますが、今は味やにおいのような服用感は審査時の品質評価項目には入っていません。以前、ある薬で、壊れるのが遅い、にがい、舌にざらつき感がある—などの患者さんの声が届いたことがあります。そこで複数の薬剤師に実際に試してもらったところ、服用感に問題のある製品があることが実証されました。それを受けて、品質としての服用感を評価する方法や製品間の比較データを学会で報告し、薬剤師には使用時の参考にってもらう、メーカーには我々が開発した品質評価法を利用してもらう、そういう提案をしたこともありました。

【高校生の皆さんへ】

薬剤師にとって他人を思いやる心がとても大事です。患者さんが困っていることがあったらなんとか解決してあげたいという気持ちが研究の入り口になり、突破口になるからです。

やまさき けいし
教授 山崎 啓之

